

# 夫婦の別れ

『千日尼御返事』 (定本一七六〇頁・弘安三年)

## (本文)

さては、をとこははしら(柱)のごとし、女はなかわ(桁)のごとし。をとこは足のごとし、女人は身のごとし。をとこは羽のごとし、女はみ(身)のごとし。羽とみとべちべちになりなば、なにをもんてかどぶべき。はしらたうれなば、なかは地に落ちなん。いへにをとこなければ人のたましゐなきがごとし。くうじ(公事)をばたれにかいあわせん。よき物をばたれにかやしなうべき。一日二日(いちにちにち)たがいしをだにもをぼつかなしとをもししに、ごその三月の二十一日にわかれにしが、ごぞもまちくらせどもみゆる事なし、今年もすでに七(なな)つき(月)になりぬ。たといわれこそ来たらずとも、いかにをとづれはなかるらん。ちりし花もまたさきぬ。をちし菓(このみ)もまたなりぬ。春の風もかわらず、秋のけしきもごそのごとし。いかにこの一事(いちじ)のみかわりゆきて、もとのごどくなかるらむ。月は入りてまたいでぬ。雲はきてまた来る。この人の出でてかへらぬ事こそ天もうらめしく、地もなげかしく候へとこそをぼすらめ。いそぎいそぎ法華経をらうれう(糧料)とたのみまいらせ給ひて、りやうぜん浄土へまいらせ給ひて、みまいらせさせ給ふべし。

## (現代語訳)

さて、家屋に譬えるなら、男は柱のようなものであり、女は桁(けた)のようなものである。身体に譬えるなら、男は足のようなもので、女は胴体のようなものである。鳥でいうならば、男は羽のようなもので、女は体のようなものである。羽と体とが別々になってしまったら、どのようにして飛ぶことができようか。柱が倒れたら、桁は地に落ちて家屋は壊れてしまう。家庭に男主人(おとこあるじ)がないと、人の魂が抜けてしまったようなものであり、頼りなくなってしまう。また社会的な権利義務に関することを誰に相談したらようであろう。おいしいものを誰に食べさせたらよいであろう。男主人とは一日か二日会わなくても不安がつのであるように、あなたは、去年の三月二十一日に阿仏房殿に先立たれて、去年一年間待ち暮らしたのに会うことができない。そして今年もすでに七か月を経過してしまった。たとえ阿仏房殿ご自身が来られなかったとしても、どうして連絡だけでもしてこないのか。去年散った桜が今年も咲いた。また去年落ちた果実(このみ)が今年も生(な)った。春風は去年と変わらずやさしく吹き、秋の景色も去年と同じように心にしみいる。自然はそのように巡(めぐ)りくるといふのに、どうして阿仏房殿の生命だけが消え去っていった、もとに戻ることはないのだろうか。月は入ってもまた出でる、雲は行ってもまた来る。それなのに人は死んだらもう帰ってこないということこそ、天も恨めしく、地も歎かわしいことである。ご夫君との永別を体験なさったあなたは、とくにそのようにお思いになることであろう。急ぎ急ぎ、法華経を旅の食糧とお頼りして、靈山浄土へ参り、阿仏房殿にお会いなさるようになさい。